

## 楊毓麟の政治思想について

清 水 稔

### 一

一九〇四年二月、湖南革命派の最初の政治結社華興会が、長沙の明德学堂を舞台にして結成された。<sup>①</sup> 発会にあたって會長黃興は、次のような宣言を発表した。「本会は皆革命を実行する同志ばかりであるから、蜂起の地点と方法を討論して適切な方針を決めておく必要がある。一つは、首都北京を陥れ、瓶の水を屋上から覆すように地方に波及させることである。例えばフランス大革命がパリから、イギリス大革命がロンドンから起こったように。イギリス・フランスの革命は市民革命であって、国民革命ではない。市民は都市で成長し、自らその専制の痛苦を受けたから決起して闘うことができた。我々の革命は、北京の安逸を貪っている無知の市民に依拠して満州朝廷を倒すことはできないし、また異民族の禁衛隊と合作共謀することもできない。したがって我々の蜂起は、まず一省に雄拠して各省とともに決起する以外に方法はない。……今、湖南省について論ずるならば、軍隊と教育界においては革命思想が日に日に広まり、市民もまた次第に目覚め始めてきた。そのうえ我々と同じ排滿の宗旨を掲げる哥老会の人々も、すでにかなり結集している。ただお互いに躊躇しあい、進んで先に起とうとしないだけである。まさに爆薬が準備され我々が

点火するのを待っている状況である。もし連合し時期をみて、会党かあるいは軍隊・教育界より決起し、お互いに協力し合えば、湖南省を根拠地にすることは難しくない」と。

ここに示された華興会の革命方略は、地方から首都を包囲する分省蜂起、中等社会の主導による革命論、下等社会との提携などを特色とし、西欧の市民革命とは異質な国民革命を構想している。それは黄興の発案にあるのではなく、楊毓麟の『新湖南』・「民族主義的教育」を青写真にしていることはよく知られるところである。しかし楊は、このような中国革命の原型ともいえる革命方略を打ち立てながら、華興会結成以後、湖南における革命運動史からその姿を消した。その後の彼は、もっぱら上海・北京などにおいて、暗殺団の組織やその工作活動に従事し、時には言論活動を通して、時には政界に潜入しながら、暗殺実行の機会が到来するのを待ったが、それを果たすことなく、一九一一年七月、病が高じ、異国の地リヴァプールの埠頭から海に身を投じて四十年の生涯を閉じた。

特に楊毓麟が研究者の注目を引いているのは、湖南革命派のイデオログとして先駆者的位置を占めている点にある。本稿は、先学の業績に導かれつつ、彼が湖南革命戦線の統一をめざす華興会の結成や綱領作成に大きな役割を演じながら、何故に暗殺主義を奉じて湖南の戦線を離脱していったのかについて、主に彼の革命思想の面からその特徴をより本質的に明らかにするなかで考察しようとするものである。

## 二

楊毓麟の革命論の特徴は、帝国主義諸列強の中国侵略によって国が減び、漢族そのものが減んでしまうという危機感を軸に、革命の必要性を鋭く訴えているところにある。彼は言う。「今の世界は、すでに二十世紀の舞台に入っただから、二等国以下には地球上に国旗を立てられる地はありえない。」<sup>①</sup>「白禍が極東に流れ込み、揚子江・黄河流域を帰墟としている。同じアジアの種族を結集してこれを塞がなければ、精力は尽き果て、結局は滅亡するだろう。」<sup>②</sup>

結集を図るには中国以外に望みをかけるところはない。「しかし中国の権力は満州政府に握られている。彼らに頼ることができようか。」<sup>⑨</sup>今、漢族が満州政府より離脱して結集の要とならなければ、「白色人種の毒酒毒肉によって死にいたることになるだろう」と。

ここで彼は、亡国滅種の元兇、「白禍」・「白色人種」を「民族帝国主義」と名づけ、その中国に対する残虐な支配のあり方と、それによる民衆の悲惨さとを、湖南省の現実を踏まえながら怒りを込めて語る。「列強のこの帝国主義を実行する方針は、植民政略を中核とし、租界政略・鉄道政略・鉱山政略・布教政略・工商政略をその次第とし、これによって植民政略を組織して精密完全の域に到達させる。」<sup>⑩</sup>「はじめ租界政略というものは、治外法権の損失があった。……政略が変わると、租界の名はあるが、実は土地所有権および先取権が皆そのなかに含まれるようになった。はじめ鉄道政略というものは、資本流入の損失があった。……政略が変わると、契約の名はあるが、実は軍事上の関係および政治上の関係が絡み、請負の範囲を越えるようになった。はじめ鉱山政略というものは、外人の持株が入るという損失があった。……政略が変わると、地主の名はあるが、実は全省を区分し州県を越えて鉱脈を独占した。しかし地方の官吏も朝廷の重臣も敢えて問責しようとはしない。はじめ布教政略というものは、民衆と教民とが争いを起こすという損失があった。……政略が変わると、ただ保護を名とするのみ、実はこれを利用して要地や領海権を奪取した。……はじめ工商政略というものは、小枝が伸びるように内地に侵入し、巨額の銀を持ち出した。……政略が変わると、名は工商勢力の範囲だが、実は政治の範囲であり、数百年の老舗が看板はまだそのままなのに、知らぬ間に他人の手に渡っている。」<sup>⑪</sup>「これらの政略はその一つでも我が湖南人の命脈を断つことができる。貧しい湖南では重要な利権が他人に握られ、そのうえに賠償・修理の名目が重なり、生存の望みを絶たれている。ましてや毎年分割返済しなければならぬ巨款によって、元氣は消耗し尽くされている。」<sup>⑫</sup>列強の湖南に対処する方法はこれだけではない。「彼らは不肖の官吏を指揮して我が忿民を殺戮し、不肖の紳富を指揮して我が懦民を取り締まり、不肖の教民を駆り立てて同胞の殲

滅を謀り、不肖の窮民を騙して異民族の擁護を飯の種にさせている」と。

つまり列強こそが湖南・中国に貧困をもたらした根源であることを見抜き、経済上の動脈を押さえる帝国主義支配のあり方を明確に把握していた。しかも彼の対帝国主義認識はその経済支配に留まらない。列強の侵略が民族の内部にまで侵透し、「中国人をもつて中国人を倒す」・「湖南人をもつて湖南人を倒す」という、いわば同類相食む事態を引き起こしている点をもみごとにえぐりだしている。かくして彼の政治意識は、義和団後に特徴的な客観的現実を反映しつつ、帝国主義と中国との全面的な矛盾に集中される。

さらに国内権力構造内における帝国主義の位置をも彼は正しく理解していた。「(列強は)我が土地を国外の蔵として利用し、また満州政府を蔵の番人の胥として利用する。我が利権を利用してその陰謀に役立て、満州政府を窃符の使として利用している。」<sup>⑨</sup>「もしわが国民が武器を取つて列強を駆逐しようとすれば、列強は満州政府の兵力を借りて彼らを滅ぼし、その名を正当化して、これは盗賊の行為・野蠻の振舞であると天下に表明させる。もし我が国民が戈をおさめて不<sup>⑩</sup>断の生活に戻れば、列強は満州政府の賠償金を通して彼らをむしばみ、その名を正当化して、これは国際の安寧を維持し、外交の友誼を保全するためであると天下に表明させる」と。すなわち義和団運動後、列強が「満州政府の扶植策をもつて、弱くて愚かな中国を併合する秘策とした」<sup>⑪</sup>ことによつて、満州政府は野蠻排外から全き媚外に転換し、その意味で帝国主義が中国の眞の政治的支配者に転化したという、二十世紀初頭の新しい特徴的な権力構造を、彼は的確に把握した。かくて彼によれば、列強は「虎」であり、満州政府はその「俚」<sup>⑫</sup>、列強は「羅」<sup>⑬</sup>であり、満州政府はその「囹」<sup>⑭</sup>、漢人と一般民衆は「奴僕おとこの奴僕」・「白色人種の奴隸」にすぎないと。彼が漢民族にとっての主要矛盾をどうとらえていたかが推測できよう。

楊は、危機の出発点となつた民族帝国主義を単なる感性として受け止めているのではない。それを生み出した本質にまで立ち入つて把握しようとしている点は注目される。「民族帝国主義の原動力は、政府の一、二人の野心から出た

ものではなく、国民の生殖力・繁殖力の膨張にある。また一、二人の武将の権謀術数から出たものではなく、国民の商工業の発達・資本の充実による膨張にある。發生の基本は全国民の思想にあり、運動の機関は全国民の耳目にある」と。つまり彼はヨーロッパの帝国主義が、国民国家の膨張・拡大、資本主義の発展・充実の結果であるにとらえ、それは「優勝劣敗」の理論に支えられ、必然的に植民地進出・争奪をもたらすものであると指摘する。素朴ながらも資本主義から帝国主義国家への転換過程を法則的に把握している。その結果としてヨーロッパ諸列強は、東アジア中国を「二十世紀商工業の競争の中心点」とし、「賓客」の座から「主人」の座についたと説く。そして彼は言う。この帝国主義は実は民族主義を根底としているから、帝国主義の潮流を阻止するには、民族主義による堅固な城壁を築いて防がねばならないと。すなわち列強侵略の論理は帝国主義の世界観が、弱肉強食・優勝劣敗の世界観にあることを指摘しつつ（同時にそれは彼の政論の出発点ともなっているのだが）、その論理的枠組のなかで、漢民族を主体とする民族国家建設こそが、二十世紀の世界に中国が適者として生存しうる唯一の道であると論じる。しかし一方で、かかる進化論に支えられた列強の侵略行為が「弱者」の立場から「全く不徳を恥じぬもの」として批判されていることも注意を要する。

彼は、当時の複雑な政治的諸関係における主要矛盾を漢人に対する民族帝国主義ととらえた。彼の内にあっては白人種と民族帝国主義との対決・対立こそが、「救国」・「愛国」の一大宗旨であった。そのためには漢人を中心し、民族の結集を図らねばならないと主張する。彼は言う。「排満と排外との二重の刺激力が漢民族の心と目に入ることによって、そこではじめて結集を言うことができる」と。つまり民族帝国主義と満清政権の打倒すなわち反帝反満の統一こそが、彼の革命論を支える政治認識であったといえる。

彼は明確な反満思想の持ち主であった。「二百年來の歴史は総て愛新覺羅氏の罪状である」、「我々がいつ奴隸の戸籍に入ったのか知っているのか」、「我が湖南人はかつて一日たりとも奴隸の恥辱を忘れたことがあるか」、「今こそ

二百数十年の累積した恥辱を雪ぐ時である」などと彼は呼びかけ、排滿の論拠を漢民族の自覺の欠如にもとめて次のように語る。「明末から今世紀に至るまで、滿州人が天府を盗んで占拠し、かえって朱子学を尊重することによってその庄制と束縛の大義を天下に広め、ついに我が国民はその本質を忘れるに至った。ヨーロッパ人と聞けば彼らを夷狄とみなすが、異民族である滿州人が文明・學術・政治理論において、ヨーロッパ民族よりはるかに下であることを知らない。ヨーロッパ人を見れば彼らを憎むが、かの賤しい種族である滿州人が我が民の進歩を塞ぎ、我が民の權利を奪い、我が民の英傑を皆殺しにし、また喜んでヨーロッパ人の貪欲に奉仕し、自らその爪牙となつてゐることを知らない。今日ヨーロッパの陷穽<sup>おとしな</sup>から抜け出したいと望むなら、滿州人の陷穽から抜け出さねばならない。ヨーロッパの陷穽は滿州人をその入口としている」<sup>②</sup>と。つまり彼の排滿論は、一つは、清初の揚州・嘉定における漢人大虐殺、文字の獄や弁髪<sup>べんぱつ</sup>の強制などを含めて滿州人の中国支配の罪状を、民族的な憎しみをもって語ること（伝統的な排滿復仇論）によって、一つは、前者の延長上に、今の清朝が帝國主義諸列強の傀儡で侵略の尖兵たることを政治問題として強調すること（西欧的な政治理論）によって構想される。とりわけ後者は楊の排滿論の有力な理論的根拠となつてゐる。しかし彼の排滿主義の根底には、なぜ野蛮民族たる滿州人が昂然として二百六十年も天下の共主となりえたのかという問題意識がある。それを、個人と民族を専制支配体制に縛りつけた「名教」にもとめ、かかる「名教」の桎梏からの解放こそが排滿を実現する第一歩であるとした。<sup>③</sup>前文との関わりがなかで考えるならば、そのためには漢人自身が民族的に目覚めることであり、それによつてはじめて滿清の打倒が可能になるといえる。

## 三

このような列強の支配下の危機にあつて、中国人はいかにあるべきかについて、楊毓麟は「中等社会」の團結とその主導による革命の必要性を訴えた。そこで彼の言う「中等社会」とはどのようなものであるのかを考えてみたい。

彼はまず中等社会を「全省の議論・思想を主導するもの」と規定し、中等社会の他の社会層に対する役割を次のように位置づけ、彼らの責任と自覚を促した。「諸君（中等社会）の湖南における位置は、実に下等社会がその生命を託するところであり、上等社会にとって代るものである。下等社会と提携し、上等社会を矯正することは、まさに諸君の責任である。上等社会を破壊し、下等社会を育成することもまた、諸君の責任である」と。楊は革命のために誰が敵であり、誰が味方なのか、誰が指導し、誰と提携しうるのかを明確に指摘している。湖南の現実に立ち返って考察するならば、矯正・破壊されるべき上等社会とは、「個人の私利私権」を争い、「湖南人の公利公権」を犠牲にした、湖南の破壊の元兇、王先謙・葉德輝・孔憲教らの「悪徳紳士」や「湖南の大吏」たちであり、指導・育成されるべき下等社会とは、前者による経済的・政治的・社会的圧力の強化によって、既存の農村社会から食み出た貧民大集団である。彼の言葉を借りれば、「秘密社会」・「軍人社会」・「労働社会」がそれである。彼はこのような階級分析のうえに立って、自らが属する中等社会を革命運動の主体として位置づけ、その指導のもとに会党などの下等社会との提携を模索した。

しかし彼は、現実の湖南において中等社会が革命運動の中核となりえるだろうかと反問する。なぜなら「湖南中等社会の議論・思想は分散して統合せず、徒党を組み仇敵となつて相争い、刀槍が林立している」からである。そこで彼は湖南における革命的な民族遺産の継承問題を提起することによって、中等社会の団結、自覚と決起を促した。一つには、湖南民衆が明朝滅亡後も清朝に抵抗し続け、凄惨な弾圧を受けた事実を掘り起こすことによって、二つには、王船山の学術思想を通して征服された民族の悲しみや国家喪失の痛みが、湖南人のなかで不断に継承されてきたことを明示することによって、三つには、王船山の精神を直接継承した者として、また湖南特有の「独立の根性」を体現した者として、譚嗣同・唐才常・賀金声らを挙げ、彼らが「湖南の奴性」を破らんがために「湖南人の血をもって湖南の地を染めた」その「流血」の精神を称賛し、その継承を訴えることによってである。

楊の中等社会革命論は、あくまでも「中等社会」に求心力がある。彼の太平天国と湘軍の評価をみてみよう。湖南人が同種族に対し、他省よりもはるかに重大な責任を負うことになったのは太平天国からであると指摘し、譚嗣同の言を引きながら、太平軍を弾圧した曾国藩・左宗棠らの湘軍が、種性を忘れ同種族を殲滅して満州族に媚び、天下に大罪を負った点が反省される。しかし湖南郷村の子弟たち（湘軍）が立ち上がったのは、太平天国が目先のことにとらわれた、遠謀深慮のない「流賊の暴乱」であり、また彼らが「湖南士人」の継承する学説とは異なる天主教を奉じたからである。したがって湘軍が太平天国を滅ぼしたことに罪はないと言いつ切る。むしろ湖南人が天下に罪を負わねばならないのは、曾が太平軍鎮圧の余勢をかって天下を取ることができなかったことにある。曾・左がお互いに協力して太平天国軍・捻軍を吸収し使用すれば、夷狄を遼河の外に追放することは容易であったはずなのに、書生の小節にこだわり、国民の大恥辱を忘れたことがもつとも惜しまれると。つまり楊が、省論を主導する湖南中等社会に湘軍が支えられていたという主観的な認識および「湖南人の湖南」という悪しきセクショナリズムを無条件に肯定する観念に立つかぎり、湖南人の「原罪」を背負った中等社会に対する責任と自覚の要請はますます強くならざるをえないし、逆に太平天国の「流賊」の痛みも、またその反満の民族主義的側面も、湖南中等社会の後景に退かざるをえない。

このような彼の認識は下等社会の分析のなかでも展開される。下等社会を構成する遊民・流民の析出構造を、単に開港による貿易の中心地の移動とか、湘軍の解散、慢性的な自然災害や飢饉にもとめるだけではなく、とりわけ一八九〇年代以降の、列強による植民政略の推進および洋務運動による半封建的な支配体制の強化にもとめ、かかる内外二重の支配と抑圧のなかで、伝統的な農村経済の崩壊と農民の遊民化が急速に進んだことを明確に指摘している。したがって下等社会が自然発生的に排外暴動を起こすのは当然の帰結である。ここにおいて彼は、下等社会の決起せざるをえない客観的状况に理解と同情を示しながら、主観的には彼らの行動は盲目的だとして次のように批判する。「下等社会は自覚がほとんどなく、一切の行動は全く無意識であり、ただ洋人に膏血を吸い取られ、權利を侵犯



されたことをかすかに聞くと、自分で自分を救う術を知らず、今日は一洋人を殺し、明日は一教会を焼けば、洋人の野心を挫き中国へ来る道を塞ぐことが充分できると考えている。」<sup>③</sup>このような無知蒙昧な下等社会の「野蛮な暴動がしばしば外国人に侵略の口実を与えた。」<sup>④</sup>衡州教案しかり、辰州教案しかりである。もしも教案があと一、二度起これば、湖南全省の土地を売っても賠償金に足りないだろうと。<sup>⑤</sup>また義和団の例を引きながら、下等社会の暴動を放置すれば、最後は「某国順民」の旗をもって八か国連合軍の将兵を迎えた義和団の失敗を繰り返すことになるだろうと。下等社会が無知野蛮なるが故に、排外暴動に対する否定的評価が表明される。

それでは下等社会の暴動を否定し去っているのかと言え、そうではない。下等社会の「奴性はまだそれほど深固ではない」と、その力量を評価したうえで、中等社会による指導の必要性を訴える。「湖南の人士が湖南の病状を診察すれば、利害の形勢は明瞭である。存亡の時期はさし迫っている。……このような時に諸君が悟らず、下等社会の擾乱を放置し、彼らをどのように指導し扶助するかを考えず、また上等社会の腐敗墮落を放置し、彼らをどのように改造するかを考えなければ、たとえ天がわが湖南人に恵みを施そうとしても、この骨なき血なき感覚なき無学文盲をどうすることもできない」と。<sup>⑥</sup>彼にとって中等社会こそがあくまでも革命の主体であらねばならない。それ故に彼の発言は、地方の政治・経済・社会を現実を支える担い手としての立場からの、極めて階級的な側面を持つものである。

ところで楊は、排満・排外の実践的課題を実現するために、下等社会と中等社会の相互関係をどのように位置づけたのであろうか。まず「支那民族が革命の事業を經營するには、下等社会を根拠地とし、中等社会を運動場とする必要がある。故に下等社会は革命事業の中堅であり、中等社会は革命事業の前列である」<sup>⑦</sup>と規定し、「支那の労働社会・軍人社会は、大半は秘密社会から出ている。だから軍人社会・労働社会と秘密社会とがお互いに協力し合えば、自ら抜くべからざる根拠となる。それ故に下等社会の革命教育を担当するものは、この三つの社会を連合して統一の

機構をつくり、その活動を積極的に推進するべきである」と。これは、中等社会の先進部分によってつくられた革命結社華興会とは別に、会党間の連絡機関として構想された同仇会の結成に繋がった認識と言えよう。彼の論点は組織論に終始しているわけではない。「凡そ各国の民族が革命の事業を鼓舞振起するのに教育の影響によらないものはない」との分析に立って、中等社会の下等社会に対する革命教育の実践を提起する。「秘密社会なかくと伍となり、その古い思想を転移させて新しい思想を注入し、古い手段を転移させて新しい手段を注入する。労働社会と伍となり、その古い知識を改めさせて新しい知識を注入し、古い習慣を変えさせて新しい習慣を注入する。軍人社会と伍となり、古い勢力・古い事功を排除させて新しい勢力・新しい事功によって聳動させる。」そのためには「通俗講演の会場」への結集、「通俗講演の文字」の流布の二方法によって、下等社会に対する啓蒙宣伝活動を展開しなければならぬと。ここで注目すべき点は、下等社会（とりわけ秘密社会＝会党）を革命の根拠地・中堅と規定し、彼らに革命の主要なエネルギーを見出し、それに規定された下層民衆を中等社会の啓蒙活動によって革命の主体に転化させようとした点である。しかし下等社会（会党や新軍）との提携による革命方略は、当時の革命家の間では常識であったといえる。そのなかにあつて楊の革命論の特異な点は、ロシアのナロードニキ運動との対比のなかでそれを位置づけたところにある。つまりロシアのナロードニキが伝統的な農村共同体ミールに革命の拠点をもともとめて農民の啓蒙活動を展開したように、彼はミールに代えて下等社会（とりわけ秘密社会）に革命の拠点をもともとめたことである。

彼は下等社会に対する教育のみを説いているのではない。下等社会に拠点をつくるためには、中等社会が活動の舞台となり、その前衛部隊にならねばならないとする。そのための革命教育事業＝組織方針として、第一に「特別の団体」を設立すること、すなわちまず各々確定した方針を持つ小団体が組織され、それらがお互いに共通した統一の主義を持つこと、第二に新聞・書籍の秘密出版を行ない、団体の意志の疎通を図ること、第三に「公共の機関」を組織して各団体の勢力を統合すること、第四に進取の風尚を鼓舞することなどを提起した。この組織論の第一義は、彼の

言うごとく、「幅広く中等社会を結集させる方法を構ずる」ことにあったと思われるが、前述の「特別の団体」と「公共の機関」との相互関係をトレースすると、組織論の力点は別のところにあるように思われる。彼の組織論の出发点は、まず中等社会の一員として民族意識に目覚めた個人が、意見や手段や分野を同じくするもの同志で特別の団体＝小団体を、自由意志で自主的につくることにある。あくまでもこの活動を基礎に次の段階として、これらの小団体を連合統合した公共の機関の設置が構想された。したがって彼の組織論はルソー流の社会契約論的な集団組織論を反映しながら、排滿革命の実現に向けての個人の自覚あるいは同志的結合にウエートを置いているように思われる。

#### 四

楊毓麟は湖南中等社会の歴史のなかに中国民族のよき革命的伝統を見出し、それを継承することによって、また中国人が自覚的に結集することによって、救国の課題を実現しようとした。しかし彼が自国の歴史と民族的なエネルギーにのみ満足していたわけではなかった。すでに述べたように彼の革命論の出发点は、進化論的思想を体现した列強の侵略＝中国の危機にあった。それ故になぜ列強は富強になりえたかを問う。「十六世紀以前、ヨーロッパ人は民族建國主義というものを知らず、それで天下を國家とみなす誤りがあった。個人權利主義というものを知らず、それで政府を國家とみなす誤りがあった。これを知って封建が倒れて新國家が興り、專制が倒れて憲法が確定した。天下を國家としたから愛國の公心がぼんやりとしてはっきりしなかった。政府を國家としたから愛國の熱力（エネルギー）が抑えられて伸びなかった。ヨーロッパの政治學說というものが全力を挙げてこれを破り、ついに十九世紀の成熟した国力をつくりだすことができた」と。つまり彼は、ヨーロッパ近代政治思想史のなかからヨーロッパ諸國の富強の要因＝近代ブルジョワ國家の形成の源泉を民族建國主義と個人權利主義に見出し、それを摂取することによって漢人による新國家建設の理論を構築した。

まず民族建國主義から検討しよう。民族建國主義とは、民族を基礎単位として國家を建設することであり、しかもそれは國家建設の基礎において絶大な凝結力を持つものである<sup>④</sup>。それでは彼の提起する民族建國主義は自己の革命論のなかでどのような意味をもち、どのような位置を占めるのだろうか。第一は、帝國主義の潮流を阻止するものとしてである。なぜなら帝國主義の根底にあるものは民族主義だから、それを防ぐには自らもその民族主義の発動によらねばならない<sup>⑤</sup>。つまり列強の侵略の論理を取り込むことによって構想される。

第二は、「救國の術は國民の精神を振起し、國家の思想を養成することにある<sup>⑥</sup>」という國民教育論に対する批判としてである。彼は「國民」の概念から「民族」の概念を分離しなければならない<sup>⑦</sup>と言ふ。なぜなら戊戌の政変・義和團運動を経過した今、「國民と民族とはその意義の包含するところが異なっている<sup>⑧</sup>」し、また民族の主体形成のための民族教育の一段階を飛び越えて國民教育を実施すれば、「國誰氏の國たるかを知らず、民何の一種族の民たるかを知らざる<sup>⑨</sup>」ことになるからだ。つまり國民教育とは、梁啓超らの「新民說」と同様に、現実には「清朝の國民<sup>⑩</sup>」としての義務を強調するものであり、滿漢の矛盾・支配被支配の矛盾を隱蔽する論理をその内に含んでいる。その意味で國民教育批判は改良主義者への挑戦でもあった。彼は言う。「國民教育より貴いものは、固有の國粹を保存し、自古在昔の特殊な種性・風習・能力・道德を維持し、歴史の榮光を發揚し、その獨立の位置を完全にすることである<sup>⑪</sup>」と。民族教育が自己・自國を認識しうる場として、つまり漢民族の自覺と團結を育むものとしてとらえられている。なおこのような國民教育批判が、梁啓超らの國家論や政治論を支えたヨーロッパ近代政治史の理解に踏み込んで展開されたことは注目される。

第三は、排滿の科學的論拠としてである。化學式に基づく彼の排滿論の構造をトレースしよう。民族を結集するには實力を必要とする。實力には、同種を結集する親和力（自然から生じ同種において著しい）と、異種を結集する混合力（政治上の調和・宗教上の融合力によって歴史的に混成される）がある。異種の結合は後者によるが、混成でき

るか否かは民族の根性の厚・薄にある。合せる方が強大で、合せられる方の民族の根性が薄い場合、同化するか滅亡するのでなければ、必ず解散の様相を呈する<sup>⑤</sup>。今、満州政府には宗教的にも政治的にも混成する力はない。それ故に満族は白人に使役され漢族を屠殺する先駆となっている。この時期に漢族が満族の支配から離脱して自らの結集力<sup>⑥</sup>親和力を凝固させることができなければ、満族とともに白色人種に滅ぼされてしまうだろう。したがってまず「排満・排外の二重の刺激力」によって漢族を結集しなければならない<sup>⑦</sup>。楊の排満論は、その前提として満・漢の民族的区別を自己のなかで確認し自覚すること、つまり漢族の主体性を回復する場がもとめられている。単なる種族主義的な排満復仇論ではなく、漢民族国家の建設をその内に含んだ新しい排満のとらえ方といえる。

次に個人権利主義についてみてみよう。彼はまず個人権利主義を、民族建国主義の分子の和合・質点の結集を緊密にし、その組織を完備し勢力を全盛にするものと位置づけ、それは「天賦の個人の自由権」に基づくもので、ルソーによって確立された<sup>⑧</sup>と言う。楊はルソーの「民約論」を下敷に自由権・平等権・民約・主権などについて述べ、それを踏まえて国家と国民と政府の諸関係を明らかにする。国家は民約の集合によって成立するのであるから、一、二人の希望や幸福をめざすものではなく、諸人の希望や幸福をめざすものである。したがって政府は国家の一部であり、国民は国家の全体である。人々は国家に服従する一人であり、また人々は自由権を享有する一人である<sup>⑨</sup>。かくて政府は国民の意を受けて実行する「委員」、国民は「株主」、政府は「株主の支配人」という図式が提示される<sup>⑩</sup>。このような認識のもとに「国家の土地は人民が根を下す基地であり、政府の私産ではない。国家の政府は人民の共同の要望であり、政府の私職ではない<sup>⑪</sup>。」だから「政府がかつてに処分したり私物化することはできない<sup>⑫</sup>。」と。人民の専制権力打倒の合法性と正当性の根拠を論理的に解き明かしている。さらに専制権力排除の手段としての三権分立を論ずるなかで、「三権とは、国家の主権によって生じたものであり、主権は国民全体を体とし三権分立を用とする。ゆえに三権の主張は国民全体の意識である<sup>⑬</sup>。」という人民主権の観点に立ちながら、政府は主権者である国民の委託をうけた執行機関

にすぎない、だから「その地位に不適當であれば国民の公意によつて解任してよいし殺戮してもよい」と、革命権の主張にまで及んでゐる。もう解説を必要としないであらう。ルソーが「民約論」で説いた人民主権、社会契約の理論および革命権の理論が、楊の排滿革命の理論的支柱としてほぼ組み込まれてゐることが確認しうる。

彼は帝國主義の侵略に対抗するために、まずヨーロッパ流の民族主義による民族国家の建設を標榜した。つまりそれは国家を一王朝あるいは少人数の政府の私物としてきた専制の枠組とその精神的支柱である名教とを「私」として否定し、それに代わる、国民全体を主体とする「公」としての国家を建設し、国民の委託を受けた政府を組織することであつた。このように民族・国民・国家・政府・個人の諸概念の相互關係を明らかにすることによつて「共和・立憲・人民の国家に対する責任、政府の国家に対する責任、人民の政府に対する責任、政府の人民に対する責任」が明確化されるとともに、現実には帝國主義・清朝と漢民族の矛盾が赤日のもとに照らし出されることになった。ただここでも彼の革命論において、帝國主義に対するに民族主義の自覚と、異民族・専制に対するに民族国家を担う主体としての認識とを併せ持つこと、すなわち「人々がその身が国家の一分子であり、共同社会の一質点であることを知覚する」④ことが救国革命の大前提であつたことは留意されるべきである。

## 五

楊毓麟の革命論を実践の角度から考えてみよう。彼は独立のプロセスを次のように展望した。湖南が独立すれば、ただちに四川・広東が呼応し、ついで揚子江・沿海地域が解放され、清朝は全国を防衛することができなくなると。この独立構想は、武昌蜂起に始まり、各省の独立、中華民國の成立へと進展した辛亥革命を予見させるものであつた。このような構想を支えた彼の独立論を、彼が得意とする化学を用いて説明すれば次のようになる。現在の中国は湖南は「名は集合、形は巨大であるが腐敗墮落して瓦解し去る」⑤「質点排列の混合物」である。混合物は積沙のごとく

ばらばらの物質の寄せ集めである。「今日の集合（中国）は実に分割の奇痛を孕んでいる。」<sup>⑤</sup>したがってまず第一に混合物の中国を分割し、そこから湖南を分離する。分離された湖南は、その内にあって「公共の湖南」の一部としての位置を主体的に認識した各個人が「独立の親和力」を発見することによって、「親和力構造の化合物」の新湖南となりえる。次の段階として同様に各省が独立し、それらを連合して中国の独立が達成されねばならない<sup>⑥</sup>。

彼の説く「独立」の核心は四億の民が親和力を持つ化合物の一分子となることにあるのだが、それでは「親和力構造の化合物」とは一体何であろうか。彼の説明によれば、化合物はその本来の親和力の原則によらねば、決してこれを改善することも滅亡させることもできないほど強い。したがってその化学作用によって物質が密になればなるほど団結力はますます強固になると言う。「親和力」とは、科学的には二種以上の物質が互いに引きあって新物質に変わろうとする力であり、諸個人・諸集団にあっては、各々が主体性を保ちつつ、同時に相互に働きかけ合うことによって緊密な統合関係をつくりだす原動力である。彼はその実体を種性あるいは個の自覚に基づくもの、つまり種の独立精神と個の任侠精神にあると認識した。

次に独立革命の突破口を破壊・暴動にもとめた。彼は言う。「社会の改造は、旧社会に拠つてこれを組織することはできない。すなわち旧社会を破壊してこれを除去する必要がある。」<sup>⑦</sup>なぜなら旧社会は「上等社会の担い手である官紳は、自立の萌芽を絶ち、公衆の公益を奪い、<sup>ヨーロッパ人</sup>西客に媚び、私利を謀る「湖南の公敵」であるからだ。彼ら上等社会の抑圧が強まれば強まるほど、ますます反対の風潮は高まる。「抑圧は反対の良友であり、破壊の導師である」<sup>⑧</sup>と。

このように破壊されるべき湖南の現実の腐敗と上等社会の圧制・搾取の強化を明示しつつ、<sup>ヨーロッパ</sup>の近代国家成立の過程を語ることによって、破壊・暴動の正当性を主張する。「列強の文明は流血によって購われた。」<sup>⑨</sup>「イギリス・フランス・イタリア・日本における近代国家の誕生もその原動力は多かれ少なかれ暴動・破壊にあった。暴動・破壊は新しい局面を開く「<sup>エマーガン</sup>愛半乾」であり、新国家を建設する「<sup>セメント</sup>塞門得土」である。湖南もその洗礼を受けなければ

ならない<sup>⑤</sup>。したがってこのような認識に立つかぎり、暴動・破壊を論ずることはまさに「正義」であり、「愛国」であり、「貞士」であった<sup>⑥</sup>。

しかも彼は創立・成就のための暴動、精神と条理のある破壊でなければならないと説く。その論拠を破壊精神のもとでも強盛なロシアの無政府政党の活動および中国の諸反乱の失敗の分析を通して明らかにした。前者では、ロシア・ナロードニキ運動が「革命文学の時期」から「遊説扇動の時期」、「暗殺恐怖の時期」へと発展し、またその思想が「二の人から学校、軍隊へと広まったという条理をモデルにして、中国における革命」破壊・暴動のプロセスへ鼓吹↓扇動↓暗殺を提起している。後者では諸反乱の失敗の原因を、政治思想や革命教育が欠けていたこと、専制法律の外にあって宣伝鼓吹するものがいなかったことなどにもとめた<sup>⑦</sup>。

彼の言う破壊の精神と条理の核心は、「革命的教育」を喚起することにあるかに見える。したがって彼にとって革命とは「革命的教育によって破壊の方針と破壊を收拾する目的を指示し、種性・風俗・能力・道徳を同じくする民族を率いてこれに向かわせ、天下の思想を集めて意識ある破壊を行ない、天下の革命的人材を集めて価値ある破壊を行なう」こと<sup>⑧</sup>にあった。「積極の破壊があつてすなわち積極の建設がある」——この表現のなかに楊の破壊論の総てが集約されていると言える。

楊の説く暴動・破壊は決して無秩序・無条件なものではなかった。一定の条理に展望のもとに構想されている。ただ暴動・破壊の中核部隊がたとえ下等社会にあらうとも、それは必ず中等社会が主体的に切り拓いた展望のなかに位置づけられていなければならなかったことは留意して置かねばならない。ここにもまた彼の階級的限界を見出しうる。

## 六

楊毓麟は、辛亥革命期の思想家のなかでいちはやく人民の生活苦の根源を列強の中国支配に見出し、清朝を列強の



傀儡政権として位置づけた。しかもそこに集約された彼の革命論はその理論的根拠をルソーの「民約論」にもとめているが、革命の戦略・戦術の面ではロシア・ナロードニキの反権力反政府闘争に学び、そのうえに立つて分省蜂起、中等社会の主導による革命、下等社会との提携、独立論、破壊論などが構想されている。

しかし彼の革命論の諸特徴に共通していることは、たえず自己の属する中等社会に対する責務という「士人」意識の枠組のなかで思考されていることである。つまり彼の革命論の根底には、常に自己を主体的に認識し自覚することおよび自己を中等社会の革命主体たらしめねばならぬという強固な意志の存在が前提とされていることである。それ故に危機感が深化するにつれ、個の自覚に対する求心力は急進的にならざるをえない。彼が湖南独立の基礎となる「特別の団体」——小団体<sup>②</sup>の団結に「任侠の精神」を説くのはかかる認識の一表現といえよう。

また彼の革命論においてもとめられているものは、理論ではなく実践であった。その意味で任侠精神の発揚こそが抑圧された種性あるいは個の自覚を呼び起こし、勇敢率先の風気を広めることができる<sup>③</sup>と認識された。それはまた楊自身が士大夫出身のインテリゲンチヤとして自己のなかに「任侠の士」たらんとする決意を表明しているかのようである。彼が「破壊」の章で次のように語っているのは、彼の生涯を象徴的に暗示している。破壊者を爆薬・鋸水に、破壊の精神を爆薬の燃焼性・鋸水の酸化性に例えてみると、一瞬の爆発によって爆薬・鋸水はその本来の姿を留めることなく飛散するが、燃焼性・酸化力は絶大な分解力によって絶大な生産物をあとに残すと。楊はここに暗殺者としての自己を発見しているかに見える。彼の革命認識および革命論の諸特徴それ自身のなかに、このような暗殺主義に傾斜していった一断面を読み取ることは困難ではあるまい。

## 註

① 結成の日付には諸説があるが、楊世驥『辛亥革命前後の湖南史事』（湖南人民出版社、一九五七、二〇〇頁）による。

② 劉揆一「黄興伝記」（伝記文学叢刊『黄興評伝』所収）一八六一—一八七頁。

③ 一九〇二年冬、東京において「湖南の湖南人」の署名で

発表された小冊子。『湖南歴史資料』一九五九年三期および『辛亥革命前十年間時論選集』一卷下冊（三聯書店、一九六〇）に収められている。本稿は後者のテキストによる。なお本稿作成のうえで近藤邦康「新湖南」抄訳（岩波書店『原典中国近代思想史』三所収）を参照した。

- ④ 楊自身が編集していた月刊雑誌『遊学訳編』（湖南編訳社刊）第十冊（一九〇三年九月刊）所収の論文。無署名論文であるが、譚彼岸「俄国民粹主義対同盟会の影響」（『歴史研究』一九五九年一期、三九頁）によれば楊の執筆にかかるといわれ、本稿もこの説による。『辛亥革命前十年間時論選集』一卷上冊（前掲）、中華民国資料叢編『遊学訳編』第三冊（中華民国五十七年影印）に収められている。本稿は後者のテキストによる。

- ⑤ 彼の伝記を記したものは、曹亜伯「楊篤生蹈海」（『武昌革命真史』、中国近代史資料叢刊『辛亥革命』四所収）、馮自由「新湖南作者楊篤生」（『革命逸史』二）、『革命先烈先進伝』所収）、楊昌濟「蹈海烈士楊君守仁事略」（『碑伝集補』巻五七所収）、があり、その他『清史』（『革命人物誌』六、『革命先烈先進伝』所収）、中華民国史資料叢編『民国人物伝』二などにも収められている。

- ⑥ 楊世驥前掲著書、譚彼岸前掲論文、武藤明子「陳天華と楊毓麟」（『寧楽史苑』一四、一九六六）、中村義「中国における革命的民主主義者の途」（『東アジア近代史の研究』お茶の水書房、一九六七）、板垣望「排滿思想の意味」（『一

橋論叢』五八の四、一九六七）、中村哲夫「華興会と光復会の成立過程」（『史林』五五の二、一九七二）、近藤邦康『辛亥革命』紀伊国屋新書、一九七二）、大塚博久「楊毓麟とその『新湖南』」（『山口大学教育学部研究論叢』二二、一九七三）、同「一九〇三～〇四年における湖南革命派の革命意識」（『山口大学東亜経済研究』四五の三、一九七六）、同「一九〇三～〇四年における湖南革命派の認識」（『現代中国』五一、一九七六）などの研究があり、本稿作成にあたって啓発されたところは多い。記して謝意を表する。なお楊・譚・武藤・中村哲夫諸氏は、楊のナロードニキとしての側面に、中村義氏は楊の湖南革命派の理論家としての側面に、近藤・大塚両氏は楊の思想構造全体に、板垣氏は楊の排滿思想構造にそれぞれ力点を置いて考察している。

- ⑦ 前掲『新湖南』第一篇六一～六一三頁。  
 ⑧ ⑨ 同前、六一三頁。  
 ⑩ 同前、六一四頁。  
 ⑪ 『新湖南』第三篇、六二四頁。註⑨を参照のこと。  
 ⑫ 同前、六二五頁。  
 ⑬ ⑭ 同前、六二七頁。  
 ⑮ 同前、六二六頁。窃符の使とは、魏の公子が如姫に兵符を盗ませて軍の指揮権を奪った話による（『史記』「信陵君列伝」）。

- ⑯ ⑰ ⑱ 同前。  
 ⑲ ⑳ 同前、六二三頁。「民族帝国主義」の概念はすでに梁

啓超の「新民説」のなかで提示されている。

②① 『新湖南』第四篇、六三二頁。

②② 註⑮に同じ。

②③ 註⑩に同じ。

②④ 『新湖南』第四篇、六三六頁。

②⑤ 『新湖南』第二篇、六一五頁。

②⑥ 同前、六一七頁。

②⑧ 『新湖南』第四篇、六三四頁。

②⑨ 同前、六三五頁。「我が国のいわゆる名教とは、猿に木登りを教えるようなものであり、盜賊にとって都合のよい道具である」と批判し、譚嗣同が『仁学』のなかで展開した名教批判を積極的に継承している。

③① 同前、六二九頁。

③② 註⑤に同じ。

③③ 前掲「民族主義の教育」九七二頁。

③④ 註⑩に同じ。

③⑤ これらの議論は『新湖南』第二篇のモチーフである。

③⑥ 『新湖南』第二篇、六一八頁。譚嗣同は、太平天国軍の正当性を評価し、むしろそれを弾圧した湘軍を批判している。

③⑦ 同前、六一九頁。

③⑧ 同前、六二〇頁。

③⑨ 同前、六二〇—六二二頁。

③⑩ 同前、六二二頁。

④② 同前、六二二頁。

④③ 註⑩に同じ。

④④ 註⑨に同じ。

④⑤ 「民族主義の教育」九七一頁。

④⑥ 同前、九七三頁。

④⑦ 同前、九七〇頁。

④⑧ 同前、九七二頁。

⑤① 譚彼岸・楊世驥・中村哲夫前掲論文。

⑤② 註④に同じ。

⑤③ 『新湖南』第四篇、六三一頁。

⑤④ 註②に同じ。

⑤⑤ 「民族主義の教育」九六五頁。

⑤⑥ 同前、九六六頁。

⑤⑦ 同前、九六六—九六七頁。

⑤⑧ 註⑤に同じ。

⑥① 註⑧に同じ。その例としてフィンランド・ポーランド・ハンガリーのロシア・ドイツ・オーストリアに対する関係を挙げる。

⑥② 『新湖南』第一篇、六一三—六一四頁。次の段階として

満・蒙・蔵を助けて各々自ら結集させて、しかるのちにアジア中央政府をたて、ここに権力を集中することによって白禍を防ぐという構想であった。

⑥③ 註②に同じ。

⑥④ ⑥⑤ ⑥⑥ 『新湖南』第四篇、六三三頁。

67 註28に同じ。

68 註29に同じ。

69 個人権利主義がただ民族建國主義の補助として位置づけられている点は留意されるべきである。

70 71 註63に同じ。

72 73 74 75 76 『新湖南』第六篇、六四四頁。

77 同前、六四三頁。

78 『新湖南』第五篇、六三七頁。

79 同前、六四一頁。

80 同前、六三一頁。

81 同前、六四〇頁。

82 83 註79に同じ。

84 「民族主義の教育」九六八―九六九頁。

85 86 同前、九六九頁。

87 註48に同じ。『新湖南』第六篇では「特別会党」と名づけ、一定の目的・方針にもとづく党派の集団としている（六四五頁）。なお本文一四八一―一四九頁を参照のこと。

88 『新湖南』第六篇、六四五頁。彼によれば、智者は俠心、勇者は俠命、富者は俠財、貧者は俠力、文儒は俠弁、婦女は俠慧に任じ、それぞれ俠に任ずるもの同志がその能力に応じて一組となり、任俠を競い合うことによって経略・爆烈・資用・事業・流衍・奇秘が生まれ、相互に扶助し團結することによって天地の間に新風が起こり、自由の「新湖南」が成立するという。

89 『新湖南』第五篇、六四二頁。